

当代中国における日本史研究の概況について ——主に前近代史を中心に——

張 翔

中国近代における日本史研究は、黄遵憲（1848–1905）が、日本駐在清国大使館の書記官として日本に滞在した期間（1877–92年）の経験と研究に基づいて執筆した『日本国志』の完成（1887年頃）から始まったと言えよう。

その後、中国は内戦や外戦を強いられ、多くの困難により、本格的な研究がかなり遅れることとなった。1949年以降も、研究はそれほど進まなかった。その主な原因は、政治と経済と外交の状況にあった。政治的な要因は、毛沢東が推進した反右派闘争や文化大革命などに代表される政治運動で、学術研究が大きく左右される結果となった。経済的な要因は、外貨の欠乏と80年代から始まった円高により、日本の資料や文献の入手が困難だったことである。そして、当初中日国交がなかったことも無視できない要因であろう。したがって、中国本土における本格的な日本史研究は、ごく僅かなものを除けば、大体、文化大革命の終わった後の1980年代中期から始まったと考えられよう。

ここでは、主に1980年代中期以降の中国の日本史研究の特徴をいくつかに分けて簡単に紹介してみたい。

1. 当時の日本史研究は、まずいくつかの大学や研究機関に勤務し、かつて戦前の日本や欧米に留学した経験のある学者を中心に展開された。例えば、南開大学の呉廷璆氏（京都帝国大学史学科に留学、専門は日本近代史）、北京大学の周一良氏（ハーバード大学大学院に留学、専門は中国魏晋南北朝史、日本近世史）、復旦大学の呉傑氏（京都帝国大学経済学部と東京帝国大学大学院法学研究科に留学、専門は日本戦後史、現代史）、陝西師範大学の胡錫年氏（ロンドン大学大学院に留学、専門は外交史、中日関係史）、遼寧大学の張玉祥氏（広島文理大学に留学、専門は日本古代史）などである。当時の主な成果は、例えば、『日本史』（呉廷璆主編、南開大学出版社、1994年）、『日本近代化研究』（呉廷璆主編、商務印書館、1997年）、『日本史辞典』（呉傑主編、復旦大学出版社、1992年）などである。

2. 中華人民共和国が成立した1949年以降、中日間に国交がなかったため、日本語を学習する学生はごく少数であった。彼らは大体、政府機関や貿易会社に就職して、学問に専念する人は少なかった。1972年、中日国交が正常化し、1978年に中日平和友好条約が結ばれてから、日本との学术交流が盛んになり、日本について、あるいは日本史を研究する中青年の研究者が少しずつ増えてきた。それらの研究者が今、中国の日本史学界をリードしていると思われる。例えば、天津社会科学院の王金林氏（日本古代史）、北京大学の沈仁安氏（日本古代史、近世史）、宋成有氏（日本近代史）、中国社会科学院世界歴史研究所の湯重南氏（日本近現代史）、南開大学の王家驊氏（日本思想史）などである。
3. 日本史研究では、各時代の史料の原文を読むことが必須である。しかし、それは中国の研究者にとっては大きな難関であった。1980年代後期から日本人学者を中国に招いて、「候文」を教えてもらったことがあるそうだが、完璧に読めるようになるまでかなり時間がかかった。そのため、中国の日本史研究は、大体二つの時代に偏ってしまう傾向がある。一つは、大体漢文だけが通用した古代である。平安時代後期以後に関する研究を行う人はほとんどいない（日本古代文学の研究者が数人いるだけである）。もう一つは、近代以降から現代までである。現代日本語が分かれば、一応は研究ができるからである。日本の古代後期・中世・近世の時代を専門とする研究者は少ないし、研究のレベルもあまり高くないかもしれない。
4. 1980年代から今日までに中国本土で刊行された日本史教科書は、マルクス主義的歴史観の影響を強く受けている。当時中国教育部に委託を受けて編集され、教科書として広く使われていた『日本史』（前掲）で述べられている「原始」「奴隸」「封建」「資本主義」などという段階論的な枠組みがその影響の強さを物語っている。その後に中国で出版された日本史の教科書も、そのような歴史的区分を基本的な枠組みとしている。しかし、中国の大学での日本史教育においては、教科書通りに教えなくても別に問題視されないところもあるので、時間が経つにつれ歴史研究者に及ぼす影響が大きいは必ずしも言えない。

5. 1980年代以降、中国から日本へ渡る留学生は増え続けた。中でも、日本の自然科学および経済・経営や法律などを専攻する人が多いが、日本史を専攻する人はあまり多くなかった。中国に戻ってきた留学生のほかに、日本の学界の問題意識や方法論などを学んだ人は少ない。したがって、中国の日本史学界において、日本の日本史学界との交流を阻む問題が二つある。一つは、日本の史学界の基礎的な資料収集や実証的研究方法をそのまま受け入れられないという点である。文献などの基本資料が欠乏している現状もあり、実証的研究を経ずに結論に急いでしまいがちである。もう一つとして、日本史学界が、長年にわたって蓄積されてきた問題意識や研究方法にあまり馴染んでいないということがある。そのため、両国の日本史学者の交流がある程度制限されることは避けられないであろう。しかし、日本留学を終えた学生が最近少しずつ帰国しているのに加え、中国の史学界においても実証的研究がかなり再評価されるようになってきているので、上記の二つの問題が少しずつ改善されていることは確かである。

6. 中国の日本史研究者の中には、大学では歴史ではなく日本語などを専攻し、各時代の日本語の資料が読めるという理由から日本史に転じた人が少なくない。彼らによって、日本史学界の研究成果が紹介されたり、翻訳されたりしているので、大きく貢献しているのは間違いない。彼らの日本の学界に向けた発信力が強いことも言うまでもないだろう。歴史学出身の研究者の日本語レベルは比較的低いので、前者の存在は日本史研究にとって非常にありがたいことである。しかし一方で、歴史研究を専門とする者とはそれなりに趣が違う点も否定できない。そんな中で、例えば、復旦大学歴史学科では、学生らの日本語や日本史史料に対する読解力の向上にかなり力を入れている。

7. 最近、経済の発展につれて、中国の大学では図書購入資金がある程度増えてはきたが、日本史研究に欠くことのできない基本文献資料などが揃ったという段階にはまだまだ至っていない。ここ数年間、日本の歴史学者によって中国の大学に多くの研究書（筆者の知る限りでは、南開大学へは故家永三郎氏の蔵書、復旦大学へは小林一美氏、故並木頼寿氏の蔵書）が寄贈さ

れ、大学の教員や学生のみではなく、学外者の閲覧にも開放されてきている。しかし、基本文献資料が揃うまでにはまだかなりの資金と歳月を要するに違いない。筆者の知る限りでは、中国の大学図書館や資料室などはかなり日本の書籍を欲しがっている（参考までに、日本の書籍が中国の大学へ寄付される場合、中日間の送料は中国の大学で負担するのが一般的である）。

8. これまで、中国と日本の各大学間ではかなりの成果ある交流が行われている。日本の学界からの援助は大変ありがたいことではあるが、日本の大学間にはある程度の関が存在しているため、中国に向けた発信がばらばらである。人的つながりは重要ではあるが、人脈に頼りすぎると、学問に共通する基準や戦後日本史学界の良さと強さがどこにあるのか、はっきりと見えなくなることも避けられないであろう。現在、中国の学界では、戦後日本の学術研究のレベルの高さに関する認識が広まり、定着している。中国の学界で、日本史の学者のみならず、中国史の学者も日本の学界の研究成果に注目するようになってきたことは最近の著しい特色である。
9. 近年の中日関係の悪化によって、中日の学術交流という大変重要な事業がどこかで頓挫することも予想される。何よりも中国の大学を訪問する日本の学者がめっきり減っていることが一つの証左と言えるかもしれない。この間、中国の大学では、二つの傾向が明らかになってきた。一つは、学生らが将来の進路を考えて、日本語の勉強や日本史の研究を忌避する傾向がはっきり出てきている。一方、学生や社会人の日本に対する関心度が高くなってきたことが、日本研究に大きな刺激を与えているという状況も同時にある。中国の学界では、日本の学者の中国史研究レベルの高さと比べて、中国の日本史研究のレベルはまだ低いと認識されている。中国学界と日本学界との学術交流、とくに日本史に関する交流は非常に大切であり、相互理解を促進するにはぜひとも必要である。日本史研究者としての筆者は、その更なる発展を強く希望しているし、微力ながらそれを着実に推進していきたいと思う。